

危険予知トレーニングの実際 看護職大量採用時代に向けて

2006年度診療報酬改定に伴い、多くの病院で看護配置7:1を目指し、例年より多数の新規採用者数を見込んでいます。新人増は同時に事故発生のリスクが高まることにもつながり、教育・研修の場においては、事故防止のためのトレーニングが必要になります。

本特集ではKYTの考え方、実際の進め方を解説し、KYTを活用した研修づくりに役立てます。具体的なKYTシート事例を用いて、新人に「知ってほしい」「気づいてほしい」「教えたい」ポイントを例示します。



【企画協力】
武蔵野赤十字病院専任リスクマネジャー
杉山良子

解説編

KYTとは 危険察知能力を高める実践的教育・訓練方法

KYTの考え方と新人教育

「安全であること」。端的にいえばそれは「事故がないこと」で、コインの裏表の関係といわれています。では、事故を起こさず安全を保つためには、どうすればいいのでしょうか。

近年医療界で、とくに新人看護師の安全教育において、KYT(危険予知トレーニング)が注目されています。KYTとはもともと産業界で始まった労働災害防止訓練の

手法で、「まだ発生していないが、その事象、その場面に潜んでいる、目には見えない危険を予測し察知できる能力を高めるトレーニング」です。私たち医療者も、KYTを活用した教育・研修をベースに、日常的なKYK(危険予知活動)を継続することが求められます。

KYTでは医療事故の要因として、ヒューマンエラーの問題に着目します。ヒューマンエラーは人間の行動特性に起因するエラーで、個人を責めるのではなく、人間の不安全な行動や不安全な環境と関連づけて要因を考え、対策を講じる必要があります。